

占領期の児童図書：プランゲ文庫児童書コレクション

## 「プランゲ文庫検閲資料にみる少年・少女の占領期」

講師：坂口英子氏（メリーランド大学東アジア資料室・プランゲ文庫室長）

2011年12月3日（土）

### はじめに

今日はプランゲ文庫の検閲資料について話をする機会を設けていただきまして、本当にありがとうございました。

2年前、新しい広報用のビデオを作りました。その抜粋を持ってまいりましたので、まず、それを御覧になっていただきたいと思います。

— (DVDによる紹介) —

([http://digital.lib.umd.edu/video?auto\\_start=true&pid=umd:55387](http://digital.lib.umd.edu/video?auto_start=true&pid=umd:55387))

資料がメリーランド大学図書館に到着したのは1952（昭和27）年で、実際に資料の整理が始まったのは1960年代の半ばです。それ以降、2003（平成15）年までにどのような整理が行なわれていたかということは、2003年に国際子ども図書館で開催された講演会で、ラウリー前メリーランド大学図書館長が講演をしております。この講演は、国際子ども図書館のホームページに掲載されていますので、是非御覧になってください。

(<http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2003-01-01-01jp.html>)

今回の講演のお話をいただきました時に、

最初に思ったのは、いったい当時の子どもたち、少年少女、今でいう中学校3年生までの人数というのは何人だったのだろうということでした。それで資料を少し探してみました。すると、プランゲ文庫の子ども図書館の中に『社会科学習学生宝典』（堂馬重一著、平和出版社、1949（昭和24）年）という本があり、1946（昭和21）年の4月には0歳から14歳までの人口は2,619万4,000人でした。つまり、総人口の35.8パーセント、約3分の1が15歳未満の子どもたちだったわけです。この数字は、プランゲ文庫の一般書にある政府が出した統計の中にこれと同じ表が入っていましたので、信頼のおける数字だと思います。

それで、どういう形で資料をご紹介すればいいかということについて悩みに悩みました。私は図書館で働く人間で、研究者ではありませんから、一般の方にも、それから研究者の方にも資料をお渡しして、その資料で皆さんに研究していただくというのが私の仕事です。ですから、どういう形で資料を再構成するか、選択するかということで大変悩んだのです。そして、いくつか読んだ本の中で、『戦後体験の発掘——15人が語る戦場下の青春』（安田常雄、天野正子編、三省堂、1991（平成3）年）を参

考にしようと思いいたりました。この本では、実際に 15 人の方に聞き取りをしておられます。その中から 1945（昭和 20）年の敗戦当時、6 歳から 17 歳だった男子 6 人と女子 2 人の方を選びました。

ところで、話しが少し変わりますが「検閲」について説明いたします。「検閲」とはどういうことかと言いますと、検閲処分を受けたか受けなかったかではなく、検閲のシステムを通ったということが検閲を受けたということになるのだと私は思っています。

#### （スライド・『社会科学習学生宝典』）

先ほどの本、『学生宝典』の表紙です。この表紙を御覧ください。一番左に”SL”というのが書いてあります。この”SL”とは”Social Life”のことだと思います。これが、民間検閲局 CCD（Civil Censorship Detachment）が与えた分類、分野です。二番目に、”D-1880”という番号があります。これを CCD 番号と私たちは呼んでいます。その次に”3-4-49”、これは 1949（昭和 24）年の 3 月 4 日に CCD に受け入れたということです。また、”D-1880”と”3-4-49”はリンクしているので、もし日付が書かれていなくても、”D-1880”と書いてあれば、いつ頃の検閲であったか、それから事前検閲か事後検閲かということが大体分かるようになっております。

次が、”GAKUSEI HOTEN”（『学生宝典』）です。全ての本のタイトルが検閲局員によってローマ字化され表紙に書き入れら

れているのです。それから下に”5000”という数字がありますが、この数字は何かお分かりでしょうか。この”5000”というのは、発行部数です。その次が”Senka”。”Senka（=仙花）”というのは紙の種類です。それから”NR”というのは、配給外の用紙ということです。それから、“BOOK DEPT. FILE COPY”というハンコが押してあるのですが、これで CCD に保管されていた図書であるということが分かります。

### 少年少女の日常

話を元に戻しまして、『戦後体験の発掘—15 人が語る戦場下の青春』から 8 人の方の聞き取りをもとに資料を出して当時を再構成することにしました。この 8 人の方のお名前を紹介させていただくと、富岡多恵子さん、加藤秀俊さん、上野博正さん、小野耕世さん、白鳥邦夫さん、上坂冬子さん、江成常夫さん、北沢恒彦さんです。

まずは子どもたちの日常生活・文化、遊びからお伝えしたいと思います。漫画と音楽とスポーツが女子の憧れです。男子の憧れとは、スポーツや音楽など、その辺りですね。それと漫画でしょうか。女子も漫画は読んでいたと思うのですが、そういうものをご紹介したいと思います。

#### 1. 漫画

ブランゲ文庫には 2,100 点近くの漫画が保存されています。そのうち、日本国内に残っているのは 20 パーセントくらいだということです。普通、子どもの漫画という

のは親が捨ててしまうことが多いですからね。小野耕世さんによると、アメリカのディズニーやスーパーマンの漫画は、最初は原書で読んでいたそうで、その後に日本語版の漫画が出て、それを読んだということをお話しています。戦後、日本で昭和 23 (1948) 年までに一番人気があったのは横井福次郎という方だそうです。どなたか御存じでしょうか。

#### (スライド・『ふしぎな国のプッチャー』 『冒険児プッチャー』)

『ふしぎな国のプッチャー』(横井福次郎著、大日本雄弁会講談社、1948 (昭和 23) 年) 『冒険児プッチャー』(横井福次郎著、大日本雄弁会講談社、1949 (昭和 24) 年) という、横井福次郎さんの漫画です。「プッチャー」は「少年倶楽部」に連載されました。ブランゲ文庫には雑誌もあり、その雑誌に連載が確かにありました。スライドは単行本ですね。横井福次郎さんは、昭和 23 年に結核で早世されたということですが、この方が亡くなられたときに、「プッチャー」はこれからどうなるのだろうと愕然とした子どもも多かった、と小野耕世さんは語っておられます。そして、手塚治虫さんも影響を受けていたとのこと。このように見ると、『(冒険児) プッチャー』というのは普通の漫画のようですが、絵を見ていただくと、世界や地球、宇宙飛行士などが出てくる科学漫画のようです。小野さんは昭和 20 年の敗戦時には 6 歳で、これらの漫画を読んで育ったと話していま

す。

#### (スライド・『痛快ターザン』『宇宙の怪人』)

この漫画は『痛快ターザン』(横井福次郎著、光文社、1948 (昭和 23) 年) です。『痛快ターザン』は、ターザンがアメリカの少年と一緒に日本にやってくる話だそうです。

そして、スライド右側にある本は朝鮮語の漫画の本です。朝鮮語の漫画の本が一冊だけ、ブランゲ文庫にあるのです。この資料で見たいのは、出版部数が”20000”と書いてあること、これは 20,000 部 (の漫画が) 出版されたことだと思います。それともう一つ、一番下のところに”no clearance”と英語で書いてあります。それも覚えておいていただければいいと思います。タイトルは『宇宙の怪人 (宇宙의怪人)』(白衣道士作画、朝鮮新民生社、1949 (昭和 24) 年)。この漫画もちょっと SF 風ですね。

## 2. 音楽

#### (スライド・『日本童謡特撰集』)

子どもたちは歌を聞いて育っています。学校で歌ったり、それから、家庭によってはご自宅でピアノを弾いたり、そういうことをしていたと思うのですが、一般の人はたぶんラジオでいろいろな音楽を聞いておられたのではないかと想像しています。

ブランゲ文庫には非常にたくさんの音楽関係の資料があって、その中にはクラシッ

ク、童謡、歌謡曲、それから邦楽、長唄や三味線などもあります。それぞれに歌詞や楽譜、楽器の場合は使い方の本が出版されています。そして、このような音楽関係の資料も全て検閲を受けており、検閲処分を受けたものもあります。

最初に、可愛い表紙の『日本童謡特選集』（佐々木すぐる、共栄社、1947（昭和 22）年 所蔵なし）というものを選んでみました。真ん中のところに”CP”というのが見えます。先ほどのハンコとは少し違ってきます。先ほどは、”BOOK DEPT. FILE COPY”でしたが、これは、”CP”と書いてあります。”CP”というのは一体どういうことかと言いますと、”CENSER PASS”、つまり検閲にパスしたという意味です。これも Circulation（出版部数）が下の方に書いてあって、はっきり見えないのですが、数千部が出ているようです。

この『日本童謡特選集』の最初のページにあるのは、スライド左側の「花嫁人形」です。「花嫁人形」の隣、第 3 ページ目にあるのが「世界の子ども」という歌です。昨日、これを読んでおりました、「花嫁人形」、「世界の子ども」の順というのは、何となく時代を反映しているという感じを受けました。「花嫁人形はなぜ泣くのだろう」、そして、その次に「子供が仲よく手をくんで世界は進む新しく」と続きます。

#### （スライド・『リンゴの歌』）

それから、皆さん御存じの『リンゴの歌』（万城目正作曲、ヒカリ音楽出版社、1946

（昭和 21）年）の歌詞と楽譜です。

北沢恒彦さん（1945（昭和 20）年に 11 歳）は、「よく『リンゴの歌』と言われるが、中学生で聞いていて、妙に明るくておちよくっていると思った。自分は流行歌がいいと思った」と言っておられます。でも、私は、この絵はとても明るくいい絵だと思います。見ているだけでも、楽しく明るくなってくるような気がいたします。ちなみに NHK の 1949（昭和 24 年）の放送時刻表というものが偶然出てきたのですが、それを見ると、ラジオには音楽番組がかなり多いのです。例を挙げてみると、「メロディーにのせて」、「歌の明星」、「三つの鐘」、「音楽の贈り物」、「サンデー・シンフォニー・コンサート」、「邦楽」、「子どもの音楽」があります。「のど自慢素人演芸会」というのも、もう 1949（昭和 24）年から放送されていたようです。

### 3. スポーツ

#### スライド・『アメリカの兵隊さん』

『アメリカの兵隊さん』（小谷野半二絵、白菊書院、1946（昭和 21）年）プランゲ文庫には、たくさんのスポーツの本があるのですが、私の感想では、一番多いスポーツの本は野球ではないかと思います。

プランゲ文庫の婦人雑誌などに、家庭でできる子ども用グローブの作り方とかいうような記事がありまして、実際に作ってみたいという方がおられました。そして、なかなか使い具合が良かったよということを教えていただきました。もし皆さん方の中で

関心のある方がいらっしゃいましたら、プランゲ文庫の婦人雑誌をご覧になって、グローブをご自分で作ってみてください。上野博正さん（敗戦当時 11 歳）によると、経済的に豊かな家庭ではスキーもビリヤードもやっていたということです。1952（昭和 27 年）、まだ占領期ですが、その頃には裕福な家庭ではゴルフもやっていたということをお話しておられます。

#### 4. 女子の憧れ

（スライド・雑誌「それいゆ」、雑誌「ひまわり」）

「それいゆ」（ヒマワリ社、1949（昭和 24）年）は、御存じでしょうか。10 歳で敗戦を迎えた富岡多恵子さんは、大阪での少女の夢と英語について語っておられます。

「それいゆ」は昭和 21 年の春に発刊されました。出版社はヒマワリ社です。そして、「それいゆ」を読むにふさわしい女性になるための少女の雑誌として、翌年の 1 月に「ひまわり」が発刊されたと話しています。物のなかった時代であるが、中原淳一の絵と共に、インテリアの創意工夫、そして夢を少女たちに与えたということです。そしてこれが「ひまわり」の 1948（昭和 23）年の 10 月号（ヒマワリ社、1948 年）の表紙です。とてもきれいですよね。

### 学校生活

#### 1. 六三制・自治会・ホームルームなど

では、次に学校生活についてお話しします。

私たちは今の時代、「六三制」や「自治会」、「ホームルーム」、「英語」、「社会科」、「科学」、「原子力」というのは、当たり前のものだと思っています。私も団塊の世代で戦後に育ちましたので、「社会科」や「六三制」というのは従来からの制度と疑問を持っていなかったのですが、実際は戦後の教育改革によって導入されたのです。私の親は大正生まれで私が「社会科」と言ってもよくわからず、「地理」や「歴史」と言って話がよくかみ合わなかったのですが、「社会科」ができたのも戦後の話なのですね。学制改革というのは戦後の話で、1947（昭和 22）年に六三制が開始されています。これらが戦後の教育改革の結果であること、そして、これらについて私たちはよく知らないということを、この講演の準備をしていて再確認しました。

学制の改革や教育内容の変更は、児童向けの図書よりも、大人を対象にした教育関連図書で多く取り扱われています。「学習教育総論」や「教育原理」といった新しいアメリカから輸入された原理、教育の方法が、新しい未来の教育として、多くの日本の教育者に訴えられていたのだと思います。

白鳥邦夫さんは、17 歳のときに海軍経理学校で敗戦を迎えています。大学に入る前、20 歳の時に長野県の上郷小学校で、教師として 6 年生を教えられたということです。そして、そこで子どもたちと自治会と民主主義を共に経験したことを話しておられます。

### (スライド・『たのしいがっこう』)

これは『たのしいがっこう』(社会科教材研究会文、相沢光朗絵、日本書籍株式会社、1949(昭和24)年)という絵本です。

これを見ると、先生と子どもたちが和気藹々と楽しく教室を片付けたり、給食を楽しんでいます。私は戦前の学校教育とか学校のクラスがどういふものだったのかというのは、よく分からないのですが、戦前のクラス風景とこの絵を比較なされると、その雰囲気の違いがどういふものかというのが分かるのではないかと思ったりしました。

## 2. 英語

### (スライド・*Jack and Betty*)

これは1948(昭和23)年の*Jack and Betty*(萩原恭平、開隆堂、1948(昭和23)年)です。出版部数を見ていただきたいと思います。2nd stepで出版部数が72万何千部ですから、かなりの数です。先ほどの児童書の出版数は2万部、3万部だったので、それと比べると30倍です。加藤英俊さんは1945(昭和20)年当時14歳だったのですが、陸軍幼年学校では英語を学んでいたということです。アメリカで言語を専門とする人たちと話した時に、戦前は日本では、英語は「敵性語」とされていたこと、学校では教えられていなかったと聞いていたので、そう話しました。するとその人たちに、それは本当かと問い直されました。やはり私は図書館員なものですから伝聞ではなく調べないといけないと思い、いろいろ調べてみました。私の探した範囲ではそ

ういう法律は見つかりませんでした。そして、実際に加藤さんは陸軍幼年学校で英語を学んでおられます。

### (スライド・*Let's learn English*)

これが*Let's learn English*(文部省、教育図書、1947(昭和22)年)です。富岡多恵子さんが学んだ教科書です。これも出版部数を見ていただきたいと思います。Step1(ステップ1)、中学一年生は238万7,242部です。GHQが作った教科書で、表紙には文部省と書いてあります。総数は475万2,037部。先ほど御覧いただいたように、当時の中学生の数がどのくらいだったかということを考えますと、二人に一人はこの教科書を使っていたのではないかと思います。それと、思い出してみますと、二人に一人と言っても、当時私たち団塊の世代までは、進級すると古い教科書を下級生や知っている人に譲っていました。だから、数としては、もっとたくさんの方が、この*Let's learn English*を御覧になっていたのだと思います。ここで紙の種類は、“zara”と書いてあります。ザラ紙ですね。それから、“senka”は仙花紙、“R”は配給用紙(Ration)です。

## 3. 社会科

### (スライド・『村の子供』)

これは社会科の教科書『村の子供』(新協出版社、1947(昭和22)年)です。社会科は新しい教科で、『村の子供』は点字でも出版されています。点字本は他にも、平

川唯一さんの『英会話』、それから、子どもの本によくある『ヘレン・ケラー』、そういうものも含まれています。プランゲ文庫には約 200 点の点字本がありますが、ここでははっきりしているのは、視覚不自由者も、改革と検閲から例外ではなかったということだと思います。残念ながら私は点字が読めないので、説明書などで、これが大人用のものなのか子ども用なのかということを判断するしかありませんが。

#### 4. 科学と原子力

(スライド・『子供と科学』、『子供の科学』、『科学物語原子爆弾』)

次が科学です。子どもたちに対して、科学に強い子どもになろうということが、当時の大人の間で奨励されていました。スライドに朝日新聞社の『子供と科学』(明和書院、1948(昭和23)年)、それから、『科学物語 原子爆弾』(飯田幸郷著、昌平社、1948(昭和23)年)、そして、真ん中にまた朝鮮語の本(『子供の科学(어린이과학예기)』(在日本朝鮮人聯盟中央総本部文教部、1946(昭和21)年)を出しました。朝鮮語の本というのはなかなか興味深いものであって、なぜこの本を出したかということ、”received CI&E clearance”というのが書いてありますね。普通、CI&E(CIE)というのは民間情報教育局(Civil Information and Educational Section)で、この機関は、いろいろな新しい教育の改革を推進するところだったのです。CCDは表には出てこないのですが、CI&Eというところ

ころは表に出て、きれいな仕事をやっているのですね。ただし、”received CI&E clearance”というのが、朝鮮語の本に書いてあるというのは、ちょっと不思議な気がしました。それから、その下に”N”というのが見えます。普通、この場所にあるのは紙の種類なのですけれども、”N”というのは一体なのだろうというのが、この講演を準備していて、私が疑問に思ったことです。Circulation(出版部数)は、2万部になっています。

(スライド・『ラジオ』)

それから、大人向けのラジオ技術の本というのは、たくさんプランゲ文庫に保存していますが、こちらは子どもの絵本にあるラジオの本(『ラジオ』(保育社編集部(案)、鷺尾悟一絵、保育社、1947(昭和22)年)です。

## 生活

---

### 1. 家族

(スライド・『おかあさん』『バウヤトオ母サン』)

「おかあさん」というタイトルのついた絵本の数を探してみました。プランゲ文庫に漫画は2,000点くらいあると申しましたが、絵本は約1,600点あるのです。その中で、「お母さん」というキーワードで探したところ、16点が出てきました。1946(昭和21)年と1949(昭和24)年の「おかあさん」を紹介します。

スライドの上側が1949(昭和24)年の『お

かあさん』(柴野民三文、高橋春雄絵、春江堂 1949 (昭和 24) 年)、下側が 1946 (昭和 21) 年の『バウヤトオ母サン』(船木柁郎分、上田三郎絵、森の子供社、1946 (昭和 21) 年) という本です。下側の絵本を見たときに、どうもこのお母さんと坊やは疎開しているのではないかなという感じを受けました。それから、この『バウヤトオ母サン』には、お父さんは出てきません。

### (スライド・『おとうさん』)

次は『おとうさん』(松崎花子文、秋吉秀彦絵、東京：トモブック社、1949 (昭和 24) 年 請求記号 VZ3-10029-14) です。「おとうさん」というキーワードで探しますと、とても日本的だと思うのですが、ブランゲ文庫には 2 点の絵本しかありませんでした。どちらも 1949 (昭和 24) 年に出版された本です。このお父さんは戦争から帰ってきたのでしょうか。お父さんが抱っこしている子は戦後生まれという感じがしますよね。

## 2. 洋食・洋裁

(スライド・『一品料理にも応用できる献立式家庭洋食の作り方』、『図解子供服全書』)

その次に紹介するのが料理の本、それから洋裁の本です。『一品料理にも応用できる献立式家庭洋食の作り方』(関操子著、1948 (昭和 23) 年)、『図解子供服全書』(山田美恵子著、1948 (昭和 23) 年)。どちらかというと、和食や中華よりも洋食の紹介

が多いようです。パンの作り方やお菓子の作り方ですね。材料はあったのだろうかと思いますが、そういえば、「甘薯(かんしょ)の料理の仕方」というパンフレットなどもよく出てきます。それから和裁よりも洋裁の本の方が多いです。

## 3. 戦災孤児

これまでに挙げた資料は子どもを対象としたもの、また日常生活の中で親に守られた子どもを対象とした資料でした。前出の『戦後体験の発掘——15 人が語る戦場下の青春』の中で当時を語る少年少女は、父子家庭で育った上野博正さん(敗戦当時 11 歳) —お母さんは病死をされています—を除いては、両親が揃っています。上坂冬子さん—15 歳で敗戦—、白鳥邦夫さん—同 17 歳—の両親は公職追放になっています。1948(昭和 23)年の『公職追放に関する覚書 該当者名簿』(総理庁官房監査課編、日比谷政経会、1949 (昭和 24) 年)によると、20 万人以上が公職追放になっています。もちろん追放者には独身の方もいらっしゃると思いますが、この公職追放によって 20 万人に数倍する子どもたちが何らかの影響を受けたのではないかと考えられます。

『生きてゐる：上野地下道の実態』(大谷進著、悠人社、1948 (昭和 23) 年)は時代史、『孤児たち：長編』(張赫宙著、万里閣、1946 (昭和 21) 年)は小説、『蝕まれゆく青春：少年犯罪・不良行為実話集』(神戸市警察局刑事部防犯課少年係著、神戸市警察局刑事部防犯課少年係、1949 (昭

和 24) 年) は警官・婦人警官が犯罪の観点から、子どもたちと少女について書いた本です。放浪児、浮浪児は必ずしも親のない子だけではなくて、経済的な困窮、その他の理由から浮浪児になるという事例も挙げてありました。『戦災孤児の記録』(島田正藏, 田宮虎彦編、文明社出版部, 1947 (昭和 22) 年) は東京萩山学園の記録で、子どもたち、少女の作文を掲載してあります。一つだけ、小学 3 年生の子どもの「父と母を思う」という作文を紹介させていただきます。

—朗読—

僕が 2 年生までいたお母様は、昭和 20 年 3 月に戦災で死んでしまいました。僕はお母様がいないと、大変寂しくてたまりませんでした。それからというもの、しばらくはルンペンをしていても、お母様を思いました。それからアメリカ人に拾われ、半月ほどお世話になっていましたが、そのアメリカの人が帰っていったので、またルンペンをしなくてはなりませんでした。(中略) それから麹町一時保護所へ行って、2、3 日いましたが、萩山学園に来ました。(中略) ああ、お母様が生きていればなあと思います。

—朗読終了—

『生きてある』や、この萩山学園の記録などを見ていると、フラナガン神父という方の名前をよく目にします。

#### 4. 少年犯罪と検閲

(スライド・『少年防犯教育讀本』)

これは検閲処分の例ですね。この『少年防犯教育讀本』(宇田川潤四朗、協和圖書出版、1947 (昭和 22) 年) では、大阪控訴院長の藤田八郎さんの前書きの推薦文の一部が削除となっています。上の方に”Delete (削除)”というのが見えますね。この本には青少年が犯罪に至る 19 の原因が述べられていますが、当時を反映するものとして、規律性の動揺、つまり、時代の矛盾、時代の転換についていけない、経済的圧迫、戦災孤児や引揚げ孤児の放浪化、それから図書館に関係があるものとしては、健全娯楽の貧困、特に低劣なる映画、劇、紙芝居、並びに読み物の流行というのが挙げてありました。低劣なる読み物と書いてあるのですが、児童文学者協会や青少年文学懇話会では健全な読み物類を雑誌などでよく紹介しているのですよね。つまり、このような良書はいろいろな理由で子どもの手に届かなかったということではないでしょうか。また上坂冬子さん(敗戦時に 15 歳)、それから加藤秀俊さん(同 14 歳)、白鳥邦夫さん(同 17 歳)は、非難ではないが、時代に関して疑問を呈しています。

(スライド・「少女倶楽部」)

偶然に「少年倶楽部」と「少女倶楽部」の戦前最終号と戦後の号(1946 新年号)(大日本雄弁会講談社、1946 (昭和 21) 年)がありましたので、紹介したいと思います。左側が「少女倶楽部」昭和 20 年の 5 月・6

月号（大日本雄弁会講談社、1945（昭和20）年）です。この号がなぜプランゲ文庫にあるのかよく分かりませんが、表紙を御覧いただくと、青い鉛筆で”1945 May and June”と書かれています。これで検閲局の資料ということが分かります。

#### （スライド・「少年倶楽部」）

次が、「少年倶楽部」です。左から昭和20年の5月号（日本雄弁会講談社、1945（昭和20）年）、それから、出版されなかったと思われる8・9月号（原稿・ゲラあり）、出版された12月号（11・12月号、大日本雄弁会講談社、1945（昭和20）年）です。真ん中の8・9月号にはゲラがあって一スライドでは小さくてよく読めないとありますが、この文書がありました一、“DELETION”と書いてあります。このゲラが一体、一部が削除になったのか、それとも全部削除になったのか私は実際の出版物を調べていないのでよく分かりません。「少年倶楽部」の戦前版と出版された分に関しては、同じ人が検閲と目次の翻訳をしております。

#### （スライド・「少年少女」）

こちらは中央公論社の「少年少女」（1949年3月、中央公論社、1949（昭和24）年）に掲載された、引き揚げ児童の対談（「カラフトの四年間」）です。ここに「カラフト」という言葉が出てきますが、普通「カラフト（樺太）」という言葉は検閲の対象になるのです。この場合、なぜ検閲処分の対象

にならなかったかということは、ここにおいで谷先生のほうがよく御存じだと思います。

#### （スライド・『クローズ・アップ』『アルス写真年鑑 1949年版』）

次に写真を紹介します。『クローズ・アップ』（永井嘉一著、研光社、1949（昭和24）年）、『アルス写真年鑑 1949年版』（アルス編、アルス社、1949（昭和24）年）は、両方とも写真週刊誌からで、右上の写真の説明は「母子寮 戦争未亡人」とあり、後方にはお父さんの写真の前に子どもたち、前方には内職をする母親が写っています。

### 子どもを守る

さて、大人たちは何をしたかということ、別にこのような変動期の子どもたちの状態を、手をこまねいて見ていたわけではないのです。プランゲ文庫には、法律や医学や労働等、多くの子どもや青少年を守ろうとする大人の試みの出版物が所蔵されています。いろいろな資料がありますが、「婦人年鑑」（昭和23年版）がやはり一番、内容的に青少年少女の生活全般への関心を表しているようです。

#### （スライド・『あたらしい憲法のはなし』『少年少女のための民主読本』）

『少年少女のための民主読本』（篠原重利著、国民学芸社、1947（昭和22）年）は法律の本です。長野の農村部で小学校6年生を教えた白鳥邦夫さんは、『あたらしい

憲法のはなし』(宮沢俊義、朝日新聞社、1947(昭和22)年)を素晴らしいと思ったと書いています。当時、彼は20歳です。プランゲ文庫の児童・青少年のための憲法の本や、民主主義の本がたくさんあります。

## アメリカへの親しみと憧れ

### (スライド・『カムカムエヴリボディ』)

次に「アメリカへの親しみと憧れ」です。

加藤秀俊さん、富岡多恵子さん、上野博正さん、江成常夫さん(敗戦時9歳)は、ライフスタイル、風俗としてのアメリカを語っています。御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、これは『カムカムエヴリボディ』(1947年4月号、第一月刊社、1947(昭和22)年)の表紙です。「カムカムエヴリボディ」というのは「証城寺の狸囃子」の替え歌で、私がこちらで日本人の70歳を過ぎた方にこの話をしたら、「カムカムエヴリボディ」を「証城寺の狸囃子」のメロディーで歌い出されたので、驚いたことがあります。

### (スライド・『アメリカのこども』『ブロンディー』)

それから、次はアメリカの漫画、アメリカの子どもたちです。

『アメリカのこども』(坂西志保、吉村順三、杉原澄子著、英研社、1948(昭和23)年)、『ブロンディー=Blondie』(チック・ヤング著、朝日新聞社、1947(昭和22)年)に見る、アメリカの家庭に対する親しみです。

プランゲ文庫には、「アメリカの～」という名前の付いた本が11点あります。読み物にはヘレン・ケラー、ワシントン、リンカーンの名前が見られます。また、絵本にも読み物にもマッカーサー元帥という資料、タイトルが登場します。

### (スライド・『ジープ』)

次にアメリカや西洋が、自然に受け入れられている絵本を紹介したいと思います。絵本も1,600点と数が多く、どのように紹介すればよいか分からなかったのが、女子向けのを代表して「喜一のぬりえ」の蔦谷喜一(全部で4タイトルありました)、それから、男子向けのを代表して安井小弥太(全部で40タイトルありました)を紹介したいと思います。

最初は安井小弥太の『ジープ』(ヤスィコヤタ絵、国民画像株式会社、1946(昭和21)年)です。見ていただくと、左側通行です。車が日本の道路を走っているということがわかります。それから、道端の子どもが手を振っています。手を振っているのは、たぶん日本人でしょう。GI(government issue=アメリカ軍の軍人)が手を振り返しているかどうかは、ここではよく分かりません。

### (スライド・『アメリカのきしゃ』)

次が『アメリカのきしゃ』(長谷川露二著、寿書房、1947(昭和22)年)という絵本です。『アメリカのきしゃ』の裏側に「お母様への言葉」があり、「お母様への言葉

お伽の国にあるような、美しいアメリカのきしや、そのいくつかを、お子さま方にご紹介いたしました。わたしたち日本の国にも、このようなきしやの走る時代が来るように、そうした希望をもって、この絵本を企画しました」と書かれています。

#### (スライド・『はなこさん』)

次は、蔦谷喜一の『はなこさん』(須賀武雄文、蔦谷喜一絵、青樹社、1948(昭和23)年)です。お人形を見てください。日本人形と、それから西洋人形がありますね。はなこさんは西洋人形にお茶を出しています。お湯飲みではなくて、紅茶カップでお茶を出していますので、お茶は紅茶だと思われる。

#### (スライド・『メリーちゃん』)

次が『メリーちゃん』(美保優文、蔦谷喜一絵、青樹社、1948(昭和23)年)です。私はもの凄く可愛いと思うのですが、自分が塗り絵をしているときには、足が、このように丸太のような足として描かれている全然気付きませんでした。この絵を見るととても懐かしくなります。

#### (スライド・『こやたのりもの』)

次が『こやたのりもの』(安井小弥太著、昭和出版株式会社、1948(昭和23)年)です。左側通行なので、日本だと思います。現在の日本でどの辺りの絵かというのを調べたりするのは面白いと思います。

#### (スライド・『世界のりもの』)

この『世界のりもの』(安井小弥太著、童画書房、1948(昭和23)年)では、「アメリカと につぼんのおそらをつなぐボーイング ぐんぐんと 空をきる おとよりはやい ロケットき」とあります。飛行機というのはプラング文庫では面白いテーマです。私は日本の飛行機というテーマで、絵本などを調べてみると日本の飛行機の絵というのは、ほとんど見つからないのです。それで当時の子どもの本には飛行機の本が少ないのだらうと思ったのですが、今回の講演の準備をしていると、結構飛行機の絵が出てくるのです。そう、この時代の絵本に出てくる飛行機というのは日本の飛行機ではなくアメリカの飛行機なのです。ご存じのように日本の飛行機産業というのは、戦前は非常に盛んでしたが、戦後は自動車産業などの平和産業に方向転換しています。

#### (スライド・『あおいめをしたおにんぎょう』)

これは『あおいめをしたおにんぎょう』(土屋由岐雄文、藤沢龍雄絵、金の星社、1949(昭和24)年)で、書いたのは土屋由岐雄さんという方です。

#### (スライド・『おあそび』)

次は、蔦谷喜一の『おあそび』(美保優文、蔦谷喜一絵、青樹社、1949(昭和24)年)です。ちょっと読みますね。

—朗読—

(前略)

アメリカ にんぎょうは メリーちゃん  
につぼん にんぎょうは さくらこちゃん

きょうも なかよく こんにちは

—朗読終了—

この絵を見ていて、面白いなと思ったのは、「メリーちゃん」という本を探したわけではないのに、ここに出した3冊とも女の子の名前は全部「メリーちゃん」なのです。なぜ全部メリーちゃんなのでしょう？

## これからの課題

最後にこれからの課題についてお話ししたいと思います。

プランゲ文庫の児童書数は約8,000点となっています。しかしこの8,000点が実際の児童向け図書の出版総数ではないと思います。では、この数が全出版点数でないなら、実際に出版されたのは何点なのだろうと言うのが私の疑問です。例えば、『我が友フリッカ (My friend Flicka)』(アルフレッド・ニューマン著、1943(昭和18)年)というアメリカの本の翻訳があるのですが、その本にGHQが推薦する5冊の本の広告が載っています。その中に、『大きな森の小さな家』(ローラ・I・ワイルダー著)、今のタイトルでいうと『大草原の小さな家』という本があるのですが、この本はプランゲ文庫には入っていないのです。5冊のGHQが推薦する本が、1冊もプラン

ゲ文庫に入っていない。これは一体偶然なのか偶然ではないのか、検閲を受けたのか受けていないのかも分かりません。

子供用の科学の本でも日本人著者の出版物はほとんどあるのですが、アメリカ人著者の科学の本になると所蔵が少ない気がします。アメリカの本は翻訳権が関係しているのか、あるいは偶然なのか。これは研究者に任せる部分だと思います。

他にも、これは谷先生の専門分野だと思いますが、雑誌「きたのこども」の広告チラシを偶然に見つけました。しかし、北海道で出版された、その出版社の本はプランゲ文庫には単行本も絵本も1冊もありませんでした。1冊だけ、『小使いさんの日記』

(塚本長蔵著、新日本文化協会、1946(昭和21)年)というのがあるのですが、これは出版物ではなく、ゲラだけが残っています。

そして、プランゲ文庫には出版物自体はないが、出版社の提出文書だけが残っているという資料もあります。それら出版社の提出文書も、数百枚あって、それをずっと見ていくと、やはり子どもの本が出てきま県「南九州図書」から出ているのですが、この本はプランゲ文庫にはありませんでした。

次の課題として、子どもの本というのは教育関係図書や教科書などと一緒に比較しながら研究を進めていかないといけないのではないかと思います。先にもお話ししましたが教科書の出版数はとても多いのです。

国語の教科書などは無署名で著名な作家

が作品を書いているようです。また皆が皆、本を買えたような時代ではなかったのも、貸本屋に出す本と出版流通している本の業界が同じであれば、3万部出ている本が、貸本屋を通じてもっと多くの人に読まれたのではないかと思ったりします。それから翻訳書出版というのが、やはり当時の出版文化研究をする上で非常に大事な分野なのではないかと思えます。

(スライド・『たのしいがっこう』)

最後に、これは『たのしいがっこう』(かんただみち文、前島とも絵、印刷局、1949(昭和24)年)という、1949(昭和24)年の本です。教科書などが机の上に出ていませんから、この先生はただ、子どもたち

に何かを話しているのだと思います。何を話しているのでしょうか。

プランゲ文庫で11年間働いてみて、検閲を受けたことだとか、当時の子どもたちはアメリカ化されたのだろうかとか、いろいろと思いが揺れるのです。でも、今回の講演の準備をされていて、こういうきれいな絵や楽しい絵を見ていると、大人たちの子どもへの思いと熱意が伝わってきました。そういう意味で、やはりこの時代の本は非常に大事なものであると思います。たくさんの人たちに支えられて60年間、ここまでやってきたプランゲ文庫の資料です。どうぞ皆さん、これからもよろしく願いいたします。

ご清聴どうもありがとうございました。